

O2-038

乳児血管腫に対する β 遮断薬内服療法の経験

姜 亜耶、山添 敬史、鷺尾 隆太、高橋 雅也、
野田 幸弘、河崎 裕英、金子 一成

関西医科大学 小児科

【背景】

乳児血管腫(以下、本症)は出生児の約1%に見られる頻度の高い疾患で、多くは自然消退を認めるため、経過観察が基本となるが、一部の症例では薬物治療を要する。治療薬物としては、ステロイド、ビンクリスチン、インターフェロン α などがあるが効果は一定しない。近年、本症に対する β 遮断薬(プロプラノロール)の有効性が報告されており、昨年わが国においても本症の治療薬としてのプロプラノロールのシロップ剤が市販された。

【目的】

単一施設において、血管腫に対するプロプラノロールの有効性と安全性を明らかにする。

【対象と方法】

本症と診断された未治療の乳児5例(男3例)にプロプラノロールを0.5mg/kg/dayから経口投与し、徐々に増量し2-3mg/kg/dayを維持量とした。重篤な副作用を監視する目的で、治療開始後1-2週間は入院の上、心拍モニターおよび定期的な血液検査を行った。そして治療前後でMRIによる血管腫径の変化と血小板数および止血凝固機能を評価した。

【結果】

生後6か月以前の投与を開始した3例(生後2か月、3か月、5か月児)は、投与開始1か月以内に血管腫径の著明な縮小を認めたが、他の2例(生後7か月、8か月児)は効果が乏しかった。全例において、低血糖、徐脈などの有害事象は認めなかった。

【考察】

文献的には、本症におけるプロプラノロールの有効率は約80%と報告されているが、今回の検討では60%であった。その理由としては生後7か月と8か月児において効果が乏しかったことから、生後6か月以降、血管腫が消退期に入り、血栓形成傾向を呈するとプロプラノロールに対する反応性が低下する可能性が示唆された。

【結語】

本症に対するプロプラノロール治療は、低用量から開始し慎重なモニタリングを行えば安全に施行できる。有効性は生後6か月以前に投与開始した例で高い傾向があった。